

<株式会社エフエム東京 第 472 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 2 年 10 月 6 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 11 階 JET STREAM 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（5 名）

ロバート キャンベル 委員長 内 館 牧 子 委員
秋 元 康 委員
佐々木 俊尚 委員 松 田 紀 子 委員

◇欠席委員（1 名）

川 上 未 映 子 委員

◇社側出席者（9 名）

唐 島 代表取締役会長
黒 坂 代表取締役社長
西 川 取締役副社長
小 川 常務取締役
内 藤 執行役員編成制作局長
延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長
若 杉 編成制作局制作部長
増 山 編成制作局制作部チーフプロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約 21 分）
TOKYO FM 開局 50 周年特別番組
『True Stories ～誰にも話していないここだけの話』
9 月 20 日（日）、27 日（日） 18：00～18：55 放送

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■ TOKYO FM 特別番組『村上 RADIO ステイホームスペシャル ～明るくあしたを迎えるための音楽』が、2020 年日本民間放送連盟賞 番組部門 ラジオエンターテインメント番組 最優秀賞を受賞

TOKYO FM をはじめとする JFN38 局ネットで今年 5 月 22 日（金）22 時 00 分～23 時 55 分に放送した、作家・村上春樹氏がディスクジョッキーをつとめる特別番組『村上 RADIO ステイホームスペシャル～明るくあしたを迎えるための音楽』が、この度「2020 年日本民間放送連盟賞 番組部門 ラジオエンターテインメント番組」において、最優秀賞を受賞しました。

この番組は、隔月で放送している『村上 RADIO』の特別版として放送したもので、新型コロナウイルスの緊急事態宣言下に、村上春樹氏から「こんな厳しい時節だから、もしできれば“明日を明るく迎えるための歌”を集めた番組ができれば」という連絡が当社制作チームに入り、その声掛けを発端として立ち上がった企画です。新型コロナウイルスをめぐる厳しい状況やつらい気持ちを、音楽の力で少しでも吹き飛ばせたら……そんな村上春樹氏の強い思いに込めての特別番組となりました。番組終盤で村上氏は、コロナとの戦いを戦争に例えるのは正しくないと強調。「善と悪、敵と味方の対立ではなく、どれだけ知恵を絞り、助け合えるかという試練の場。殺し合う力の戦いではなく、生かし合う知恵の戦い。」と述べ、放送終了後には番組での発言が新聞各紙やネットニュース、世界中のメディアでも取り上げられ、大きな反響となりました。

最優秀賞の選考理由として、「ステイホームの中で、人々の愛や思いやりの大切さを実感させ、明日への前向きな気持ちを持たせてくれた」と高い評価を頂きました。

なお、今回のエンターテインメント部門 最優秀賞受賞により、「放送文化大賞」のグランプリ候補にもノミネートされており、11 月 10 日（火）に民放連より表彰及び放送文化大賞のグランプリが発表されます。



■2020 年 10 月番組改編

TOKYO FM では、ブランドプロミス「Life Time Audio 80.0」の更なる具体化と、昨年夏以降の抜本的な制作改革推進のもと、今年度より再設定したコアターゲット【男女 18-49 才】獲得強化に向けた 10 月改編を実施しました。

昨年より大きな課題に掲げてきました「TOKYO FM ブランドカラーの再構築」、いわゆる顔の見えるステーション像の再建に向けた現状編成の課題整理、これに基づく制作面の強化とブランドカラー強靱化に磨きをかけるコンテンツの投入に 10 月改編は力点を置きました。「伝わる言葉と心に届く音楽で生活者の日々を豊かにするオーディオコンテンツを発信しながら、生活者の人生に寄り添い、生活者と共に心豊かな物語を紡いでいく存在でありたいと思います」という当社の企業理念をまさに体現する改編となりました。

主だった番組改編では、平日午後 13 時～15 時の生放送ワイドに、アイドルグループ 乃木坂 46 メンバーでありながら慶応大卒で“歴女”としても知られ、知的な一面が話題の才女、山崎怜奈さんを起用した新番組『山崎怜奈の誰かに話したかったこと。』をスタートしました。土曜 17 時には SUBARU 提供の全国ネットの大型新番組『SUBARU Wonderful Journey～土曜日のエウレカ～』等、知的好奇心をくすぐり、音像によりイメージーションを喚起する新番組をラインナップ致しました。

並行して、当社の企業理念を番組において具現化していく上で、現行タイムテーブル全番組の中身の総点検、制作指針の徹底や一部制作体制の見直し等を進め、制作面の強化に尚一層注力してまいります。

コアターゲットの一層の獲得に向けて、平日の各ワイド番組については安易なテーマ設定や、いわゆる建前トークを廃し、世の中との繋がりや大人の鑑賞に堪えうる社会的関心事の取り上げ強化や、編成戦略として M2F2 層 (35-49 才) の聴取率拡大につながる新旧洋邦の名曲を織り交ぜた選曲改革、また今夏立ち上げた新アプリ「AuDee」を積極活用した放送×デジタルシフト強化を図りながら、存在感あるオーディオコンテンツ事業者像の具現化を目指して参ります。

【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○10月スタートの山崎怜奈さんの新番組はとても期待ができそうだ。

○山崎怜奈さんは乃木坂 46 では選抜入りしているわけではなく、大学を卒業したばかりの 23 歳。ラジオが本当に好きで地方のラジオ番組にも出演していた。あとは、テレビのクイズ番組など。ポテンシャルが高いので、今はラジオからなかなかスターが生まれにくいので、ラジオからスターが生まれてくれたら嬉しい。

○山崎怜奈さんの新番組、初回放送を聴いたが、想像以上にうまく、聞き取りやすく、アナウンサーのようだった。逆に崩れたところがないのが気になったくらい。非常に賢い子なので、放送を重ねながら成長して、女性の恋愛と仕事、あるいは結婚、色々な悩みを等身大で話して行って欲しい。何年か後に、彼女が大学を卒業したばかりの時から聴いていると、リスナーが胸をはって言えるようになったら嬉しい。そしてそれが、そのリスナーが「あの時自分も会社に入ったばかりだった」「出産したばかりだった」と振り返ることができるようになったらいいと思う。

○アイドルだからといって、「これを言うてはいけない」、「こういうことをしてはいけない」に囚われて欲しくなく、そういう型を破って行って欲しい。またラジオがすごく好きということなので、「ラジオはこういうもの」ということを熟知していると思うが、その常識もぜひ破って行って欲しい。

○初回放送で山崎怜奈さんが、帯番組が決まって、まずやったことというのが人間ドックと言っていた。23 歳なのに体に気をつけないといけないと思って、人間ドックに入ったという所が、面白いなと思った。そういうギャップも含めたセンスがあると思う。

○今後に期待していきたい。

議題 2 : 番組試聴

【番組名】

TOKYO FM 開局 50 周年特別番組

『True Stories ～誰にも話していないここだけの話』

【放送日時】

9 月 20 日（日）、27 日（日） 18:00～18:55 放送のダイジェスト

【番組概要】

本日ご視聴いただくのは、TOKYO FM 開局 50 周年特別番組 『True Stories ～誰にも話していないここだけの話』のダイジェストです。この番組は、変わり続ける街・東京で生きる人が辿った道筋を探るため、様々な文化人をゲストに招き、4 月より、毎週日曜日に放送がスタートしました。これまでに、平野啓一郎氏、中嶋朋子氏、松本隆氏、室井滋氏、古澤巖氏、きたやまおさむ氏、小林麻美氏、村上隆氏、藤田晋氏、坂本順治氏、野宮真貴氏、岩合光昭氏、泉麻人氏、岡本健一氏が登場しました。

今回ご視聴いただく 9 月 20 日（日）、27 日（日）の放送回では、音楽プロデューサー・松任谷正隆氏の足跡を辿りました。TOKYO FM の 50 周年ともシンクロする松任谷正隆氏の音楽人生、そして、ここで初めて語られるユーミンとの秘話などをお届けしました。



【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○私の世代にとって、松任谷正隆さんは神の領域のような方なので、こんなに気さくにユーミンとの出会いや、裏話を話しているのはとても新鮮な驚きがあった。すごくリラックスして話しているのが感じられて、スタッフとの信頼関係も構築されているのだろうと思う。全体的にほのぼのとして、いい番組だった。

○まだ駆け出しの頃の、成功するかしないか分からなかった当時のドキドキした感じをみずみずしく語っていただき、我々世代の希望になるというか、これほどの成功者でも、そのように戸惑う時期があったのかと。今回はダイジェスト版だったのでぜひ全編聴いてみたいと思う。

○実際、収録現場にスタッフがいたと思うが、スタッフの声はカットされて、番組は一人語り形式となっているのが大変聴きやすかった。

○最後の方で松任谷正隆さんがおっしゃっていた、心象風景とはいい言葉だと思った。私は正隆さんと同世代ではなく、もう少し下の世代だが、ユーミンの音楽に限らず、当時の音楽業界には 70 年代特有の空気感があって。私は田舎の中学生だったので、その空気感を直接共有している訳はないのだが、音楽を経由することで 70 年代の空気感をどこかで共有できているというのがあったと思う。音楽とは、ただ単にピュアな音だけではなく、その背後にある膨らみみたいなものというか、そういうのが心象風景となって一緒に聴こえてくるのは素晴らしい。

○番組から話は逸れるが、今、カセットテープ専門店があって、それが大変人気だという。数年前にお話を聞いた時、世界中のお客さんが訪れてカセットテープを買って行くと言っていた。新譜であえてカセットだけでリリースされるものもあるとか。その時になるほどと思ったのは、今のストリーミングや CD は、クリア過ぎて音そのものしか楽しめないと。カセットだとノイズまで録音されていたりする。その時の周囲の音とか。それが逆に魅力なのだろう、と聞いて納得した。音楽には、当時の風景だったり、人間関係だったり、時代の空気感みたいなものが常に共にある。それはラジオにも通ずるなど、今回この番組を聴いて思った。70 年代を知っていた人間、上は団塊世代～下は 50 代にとってはすごく懐かしくて、こういう時代があったねという、しみじみした感傷に浸ることができた。ある施設で、認知症の高齢者に、その人が思春期の頃の音楽を聴いてもらったら認知が復活した、というような話がある。10 代の頃に聴いた音楽を 40 代

50代 60代も聴き続けて、新しい音楽を聴かない人も結構いる。音楽の持つ膨らみのような部分をどうやって届けていくのか、それはストリーミングではあまり伝わってこない。最近、Spotifyにはタイムマシンというプレイリストがあって、これはある人が日頃聴いている音楽の視聴傾向から、多分この人は10代の頃にこんな音楽を聴いていたのだろうということを想定してプレイリストを自動更新してくれる。で、聴いてみると全然違ったりする。ストリーミングでは、そういう膨らみの部分がそぎ落とされてしまうのかなと。だから、ラジオはそういう膨らみの部分を届けていくことに意味があるのではないかなと。そういう部分は団塊世代じゃなく20代30代40代、みんな持っていると思うので、それぞれの世代に向け、このような番組を作っていって欲しいと思う。

○とても良い番組だった。松任谷正隆さんがここまでしゃべるのは、スタッフとの信頼関係があるからだと思う。番組の作りも大変聴きやすかった。もったいなく感じたのは、もう少し解説が入っても良かったかなと。例えば、アルファレコードが出てきたが、アルファレコードが日本の音楽業界に与えた影響、これがどういう意味なのかということをもうちょっと上手くナレーションで説明しておく、「あのアルファレコードなのか」とか、あるいは「アルファレコードってこういうことなのか」などと、知らない人でも楽しめるものになったのではないかな。あるいは村井邦彦さんは伝説的な方だが、「伝説の男・村井邦彦の息子がヒロ・ムライなのか」とか、「あのミュージックビデオを撮ったのって、村井さんの息子なんだ」という、日本の最先端の遺伝子みたいなものが見えてきたりもするだろう。もしくは、途中でさりげなく出てきたが、青山の「ユアーズ」とか。「ユアーズ」というと、ある世代にとっては、非常にパワーワード。「青山の夜中までやっているそのスーパーで買うことが、当時の業界人、オシャレな人達にとっての文化」だったとか。そういうことを少しだけでも上手く解説すると、さらに正隆さんが生きてきた、“70年代の背景”みたいなものが見えたのではないかなと思う。

○シリーズものということで、他の方の回を聴いていないので分からないが『True Stories』～誰にも話していない、ここだけの話～というタイトルがつまらないと感じた。なぜなら、テレビもラジオも「ここだけの話」とか、「今だから話せる話」とかってアプローチがあまりにも多い。「ここだけの話」と言うこと自体が、ダサい気がしてしまう。そんなことを言わないで、さりげなく言った方が、「え？こんなに話を引き出しているんだ？」ということになるのではないかなと思う。私だったら、キーワードは「待ち合わせ場所」じゃないかなと思う。冒頭の正隆さんが「この辺りでこうだね。ここでこうだったんだよ」と言っているように、正隆さんが思い出と待ち合わせする場所というのが、すごく良い

キーワードじゃないかなと思う。他の出演者も、その人にとって思い出と待ち合わせする場所はどこなのか、となる。せつかくこれだけ良い番組を作っているので、タイトルが平凡なのはもったいないと感じた。

○今までの出演者は全員自分の思い出の場所で待ち合わせているのか？

■それぞれの方から色々ヒアリングして、場所を決めている。どの程度の思い出かは分からないが、打ち合わせをしながら決めている。

○それはすごくいいと思う。私の年代には「ユアーズ」にしてもよく分かる。ここから入るのか、というのがすごく面白かった。改めて思ったのはこれまでの出演者も豪華。バラエティに富んだ各ジャンルの人。また、ナレーションを担当している女性がとても良い声。良い語り。耳障りな甲高い女性の声が多かったりするのでこのような語りは聴き心地がいい。松任谷正隆さんのエッセイを読んだことはあって好感を持って聴いた。これは思い付きだが、今後も番組が続くようなので、世の中で嫌な奴と思われている人をゲストに選んだらどうか。松任谷さんほどの人でも、人生を語ると、悩んだりつまずいたり、お金がなかったりという時代を乗り越えてきている。それがこれみよがしの言葉じゃなくて、自身の言葉で語るということで、みんながやっぱり「こういう人なのか」ってさらに好きになってしまう。それなら、あえて嫌われている人を出してきて、その人の思い出の音楽なりと絡めて番組にしたら、実はこの人、本当は良い人だったんだ、とならないかと。

○天才ユーミンが妻というのは大変だろうと思っていただけで、どこそこの家の夫婦と同じでこうやってずっと一緒に歩いてくんだな、ということが伝わってきて良い内容だった。

○私はアルファレコードには入ったことはないし、先程の夜遅くまでやっている青山のスーパーにも行ったことはないが、1つ1つの固有名詞と一緒に、何かをイメージさせる。それをすごく上手に惹きつけて、そこに私達も追体験ができる。正隆さんの語りというか番組の構成が巧いなと思った。先ほど、説明が必要という意見が出たが、私はいらぬと感じた。聴く側が調べながら聴いたらいい。連想ができるのがいい。また、番組内での曲の使い方も大変上手だと思った。

○確かに、注釈は余計かもしれない。検索したほうがいいのかも。ただ、いわゆる大衆の中には、やっぱり分からない人がいるから、その辺を理解していた方がより番組に参加してもらえらると思う。

○このような（上の）世代のゲスト、その世代の文化ならバックグラウンドについて、解説というほどでもなくていいから、ちょっとした説明があると分かりやすいというのは分かる。「ユアーズ」なんて、今はどこもかしこもみんな 24 時間開いてるから、若い人には全然珍しくないが、私は大田区に住んでいながら、キャベツを買いに「ユアーズ」に行った。そのくらい憧れの場所だった。「ユアーズで買ったんだ」「俺は行ってきた」っていうことが。そういったことを解説というほどではないにしても、ちょっと触れておくと、番組の奥行きがより出てくるのでは。今後もこのシリーズは続くだろうから、そのあたりはちょっとした補足があってもいいかもしれない。

■この番組自体が、一体誰向けなのかということに最終的にはなるのかと考える。大衆向けなのか、それとも、もっとパーソナルな、ある世代に向けてなのか。70 年代に青春を送っている人が聴くと、「ユアーズ」って聞くだけで「あー、懐かしいよね」と。「他のやつらには分からないけど、俺には分かるよ」みたいに刺さるかもしれないし、逆に言うと、そこを説明されても今の 20 代に刺さるかという、何を言っているのか全然分からない可能性もあるかもしれない。

■大変勉強になりました。次回以降の参考にさせていただきます。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「Ready Saturday Go」

10 月 31 日（土）6:00～6:40 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>